

発表サマリー

発表タイトル「現代イラン知識人のイクバル理解」

村山木乃実

東京外国語大学非常勤講師

本発表では、アリー・シャリーアティー（1933–1977）と、アブドルキャリーム・ソルーシュ（1945–）のイクバル理解を分析した。この検討を通して、20世紀以降のイランを代表する二人の知識人が、イクバルを、西洋と東洋の思想を融合させ、ペルシア神秘主義文学および思想に精通した知識人だと位置付けていることが明らかになった。

本発表では、まず、シャリーアティーとソルーシュの人物像を概観した。1979年のイラン革命の立役者として知られているシャリーアティーは、1933年にマシュハド近郊の村で生まれ、マシュハドの大学を卒業した後、フランスに留学した。このフランス留学はシャリーアティーにとって大きな転換期となった。シャリーアティーはフランスでペルシア文学、イスラーム思想、神秘主義のみなならず、社会学、西洋近現代思想も学んだ。また、アルジェリア独立戦争にも刺激を受けた。シャリーアティーはフランスからイランに帰国した後、このフランスで吸収した知識をもとに、自らのイスラーム再構築思想を「アリーのシーア派主義」と名づけ、確立させていった。彼の思想は、後に、1979年のイラン革命で中心的役割を担った若者たちに影響を与えた。そのため、シャリーアティーは革命を見ることなく1977年にイギリスで客死したにもかかわらず、「イラン革命のイデオログ」として位置付けられることになった。

ソルーシュは、シャリーアティーの思想的後継者といわれている知識人である。ソルーシュは、1945年にイランの首都テヘランで生まれ、テヘラン大学卒業後イギリスに留学し、分析化学、哲学、科学史を学んだ。イラン革命直後に帰国したソルーシュは、共和国体制で改革を行う立場に立ったものの、まもなくして、共和国体制のあり方を疑問視するようになった。現在はカリフォルニア州にある北カリフォルニア・イスラーム文化センターを中心に研究活動を行なっている。ソルーシュは、イラン・イスラーム共和国体制に対する批判だけでなく、斬新なイスラーム思想を展開していることでも知られている。クルアーン解釈に関する最新の書『ムハンマドの言葉、ムハンマドの夢』（2019）で、ソルーシュは、クルアーンが預言者の夢から生まれたという、驚くべき見解を示している。これは、クルアーンは神の言葉であるとする、イスラームの教えを根底から覆すようなものである。

シャリーアティーとソルーシュには、2つの共通点がある。ひとつは、両者ともウラマーではないが、イスラームに軸を置き、ヨーロッパの知識も取り入れた知識人である点である。もう一つは、シャリーアティーもソルーシュもペルシア神秘主義文学、とくにルーミーの作品を通してイスラームを理解する姿勢がみられる点である。

こうした前提を整理した上で、本発表では、シャリーアティーとソルーシュのイクバル

理解を検討した。シャリーアティーのイクバル理解は、結論からいえば、次の通りである。シャリーアティーはイクバルに、自らの理想を見出した。シャリーアティーにとってイクバルは理想的な人間であった。シャリーアティーはイクバルの主張したイスラームこそ、自らの理想とするイスラームだと考えた。

シャリーアティーは1955年の地方紙の連載で、イクバルを「完全な人間」として紹介したほか、イクバルの神秘主義思想はルーミーに連なるとも述べていた。フランスからイランに帰国してから、シャリーアティーは講演のなかでイクバルに繰り返し言及するようになった。シャリーアティーはイクバルについての講演で、イランの人々に、イクバルを知ることで、自分達を知り、イランが直面している問題を解決することができるかと述べていた。また、シャリーアティーはイクバルに多面性を見出し、そこから、シャリーアティー自身が目指すイスラームの精神を発見していたことも、本発表では指摘した。シャリーアティーによれば、多次元的な人間であることは同時に、イマーム・アリーのような人間であるという。つまり、イクバルはイマーム・アリーのような人間だとシャリーアティーは考えていた。また、イクバルの世界観が宗教的・神秘思想的であること、ならびに、西洋と東洋の知識を見事に融合させたイクバルが最終的に立ち戻った「自己」の重要性にも、シャリーアティーは言及していた。

シャリーアティーと同じく、ソルーシュも、イクバルを西洋近代思想とイスラーム思想の統合を通じて、イスラームを再構築したことを評価した。だが、ソルーシュのイクバル理解は、次の2点において、シャリーアティーのイクバル理解とは異なっている。一つは、ソルーシュは自ら定義した「宗教的知識人」の一人として、イクバルを位置付けている点である。もう一つは、ソルーシュはイクバルのペルシア詩の分析も行なっている点である。その精緻な分析を通じて、ソルーシュは、イクバルの詩にみられるペルシア神秘主義文学と西洋近現代哲学の影響を明らかにしている。

本発表での検討によって、シャリーアティーとソルーシュのイクバル理解の共通点と相違点が明らかになった。本発表の最後に、発表者の今後の研究の展望を2点述べた。一つは、シャリーアティーの文学作品に登場する、シャリーアティーによる架空の人物、シャーンデル（“蠟燭”の意味を持つ名前）についての研究である。もう一つは、ソルーシュの最新刊におけるイクバル理解の検討である。

質疑応答では、参加者から、シャリーアティーの他の著作でのイクバルの言及、シャリーアティーの「自己」理解、イランにおける知識人と社会との接点に関する質問をいただいた。コメンテーターの先生方からは、フランス留学を経たシャリーアティーの思想の変化、現代フランスにおけるイスラーム思想研究の議論を踏まえた上でのソルーシュとシャリーアティーの思想の相違点、南アジアおよびアフガニスタン出身の文学者による作品に対するイランでの理解に関する質問をいただいた。

本発表に対し、コメンテーターの先生方から貴重なコメントもいただくことができた。伊達先生からは、フランスでイクバルの著作の翻訳が出版されたのが1955年であり、その

翻訳の序文をマスィニヨンが執筆していたこと、フランス語で蠟燭は啓蒙を表し、蠟燭の火が消えることは、言論の自由の喪失を象徴することも教えていただいた。登利谷先生からは、イクバールは詩のタイトルとして、シャリーアティーは講演のタイトルとして使用していた「何をすべきか」は、アフガニスタンの政治家、マフムード・タルズィーの著作に由来するのではないかというご指摘をいただいた。

今回の発表は、自身の研究をさらに深めるための貴重な機会になった。参加者ならびにコメントーターの先生方からいただいたコメントは非常に励みになった。最後に、運営にご尽力してくださった先生方やスタッフの皆様に感謝を申し上げたい。